

## [概要]

本稿は、都市祭礼の変容を地域住民の意識や態度、縁故といった点から検討することで、現代の都市祭礼と地域社会の関係性を明らかにすることを試みた。研究対象とした出町子供歌舞伎曳山は担い手が不足するようになり、祭礼の運営組織は当番町制を導入したり、子供役者の選出基準を緩和したり、曳き手を近隣町から雇ったりすることで担い手を確保していた。しかし、山町内の混住化や人口減少が進行すると、祭礼参加に消極的な態度を見せる地域住民が増加し、担い手不足が深刻化していった。これは、地縁によって拘束される共同体への帰属意識が低下し、地域住民が個人の選択で祭礼への参加の可否を決められるようになったことに起因する。現代では祭礼によって形成される地域コミュニティに所属しない地域住民が増加しており、都市祭礼のコミュニティを形成する場としての役割は希薄化していることが明らかになった。その一方で、選択縁によって血縁も地縁も持たない山町外に居住する担い手が祭礼に取り込まれるという祭礼の変容が見られたため、現代の都市祭礼は、血縁や地縁に捕らわれない多様性を地域社会にもたらす装置として機能していると考えられる。

キーワード：都市祭礼，地域社会，少子高齢化，血縁と地縁，選択縁